平成30年度
No.11

大塚区だより

つないだ襷　堂々の4位入賞　愛川町一周駅伝競走大会

『町民みなスポーツの町』宣言制定30周年記念事業の一環として第64回愛川町一周駅伝競走大会が、平成31年1月14日（日）三増公園陸上競技場を午前9時45分のスタートで開催されました。

ゲストランナーとしてオリンピックメダリストのワイナイナ氏を迎え、45チームが参加する中、大塚区から1部Aチーム・Bチームの2チームが参加しました。選手の力走の甲斐あって、Aチームが4位入賞、Bチームも18位と好成績を上げることができました。選手の皆さん育成会をはじめ関係者の皆さん大変お疲れさまでした。

大塚区A・Bチーム順調なスタート

	Aチーム	Bチーム
第1区	高野羅惺	高野唯刀
第2区	梶原舟人	齋藤秀和
第3区	菅　希夢	邨松　雫
第4区	飯泉直哉	徳丸　樹
第5区	田村健太郎	山田和樹
第6区	佐竹翔太郎	邨松青空
第7区	佐竹滝一郎	佐藤安行
控え選手	齋藤伴平	齋藤照男
	荒川蒼士	齋藤功大
		岩澤裕翔

アンカーAチーム佐竹翔太郎君、Bチーム佐藤安行さんのラストスパート

表彰式を終え、大塚区駅伝チームの集合写真、見事4位に輝きました

最終成績と賞状（大塚児童館に飾ってあります）

どんど焼き

各自が持ち寄った団子を焼く模様、団子焼きの風習は元は虫歯にならない丈夫な歯になることを起源とし、広義の意味で無病息災のために行われるそうです。

平成31年1月15日（日）午後1時半より3時まで大塚児童館においてどんど焼きが行われました。当日強風のため、お飾りやしめ縄だけの焼却となりましたが、各自持ち寄ったお団子を焼いたり、自治会が用意したあべかわやきな粉餅、甘酒などが振る舞われ、皆で1年間の無病息災を祈願いたしました。

2019年出初式

平成31年1月5日午前9時半より下箕輪愛川町消防訓練場で出初式が開催されました。

壮青会餅つき大会

1月19日（土）大塚児童館にて、大塚壮青会主催の新春餅つき大会が開催されました。大勢の子供たちや寿会の皆さんも一緒に餅をつき、つきたてのお餅を食べながらビンゴゲームをして楽しい一日を過ごしました。
壮青会の皆様ありがとうございました。

積雪時の協力のお願い

愛川町は建設業者と「除雪に関する協定」を締結しており、積雪時は、幹線道路を重点的に除雪することになっています。

しかし建設重機等が入れない生活道路等については、隣近所助け合いながら地域で除雪しなければならないこともありますので、積雪時には御協力をお願いします。

定例総会開催にご案内

3月10日（日）午後1時より大塚児童館にて、平成30年度大塚自治会定例総会が開催されます。皆様奮ってご参集ください。当日参加できない方は委任状の提出お願いいたします。

2月の予定

2月23日(土)：組長解散会

消防団に加わり、あなたも地域を守る力に

阪神淡路大震災から24年が経過しました。国内ではその後も負傷者の出た地震は151件、このうち死者を伴う地震は、中越地震、岩手宮城内陸地震、未曾有の大災害となった東北地方太平洋地震や熊本地震、大阪北部地震、北海道胆振東部地震など20件も発生しており、まさに地震の活動期と言われています。

さらに、台風や洪水による被害は、毎年のように日本のどこかで起きる状況となっており、こうした災害による被害を少しでも減少させるために、避難の呼びかけや救出救助、応急手当など、地域の消防団の活動は欠くことのできないものとなっています。

今地域を守る消防団員が減少し、行政区では大きな問題となっています。通常の火災対応等には、常備の消防署があり安心感がありますが、やはり広域的な災害には、常に地域と密着している消防団の力が必要となります。

もしもの時こそ、みんなの力に

大塚と六倉地区を担当する愛川町消防団３分団５部の定数は15名ですが、団員は現在９名で８名不足しています。確かに、勤務場所が遠方であったり、勤務が不規則な人もおられますが、そうした方でも、現在消防団員として、居住地域のために活躍されている方はおります。

一度の人生、数年間　地域のために尽くしてみませんか

消防団員になることで、人つきあいも広がります。心強い仲間が増えます。そして消防団員には、もちろん公務災害公務災害補償はもちろん、報酬や一定年数勤務した団員には退職報奨金も支払われ、表彰制度も整備されています。是非仲間に加わっていただきたいと心から願うものです。

消防団についての問い合わせ先
大塚区長　齋藤増雄まで

コラム：大村　智先生のノーベル賞の価値

昨年末に今年度のノーベル賞が発表になり、本庶　佑先生が抗体を用いたガンの免疫療法でノーベル賞医学生理学賞を受賞されました。それでは皆さんは大村　智先生をご存知でしょうか。そう、日本人で3番目に2015年にノーベル賞医学生理学賞『線虫の寄生によって引き起こされる感染症に対する新たな治療法に関する発見』を受賞された方です。過去には、1987年利根川　進、2012年山中伸弥のお二方が受賞され、2016年には大隈良典先生が受賞されて日本人のノーベル医学生理学賞受賞者は5人になりました。 さて、大村先生は以前からノーベル賞候補だったのでしょうか。答えはノーです。全くのダークホースでした。大村先生は、山梨大学学芸学部を卒業後高校の教師になり、その後東京理科大学大学院に進学し修了後母校の山梨大学で研究生活に入った、遅咲きの研究者です。彼の専門は天然化学物質、簡単に言うとカビや放線菌が産生する抗生物質の研究です。全国を回っては、その地で土壌を採取して、そこからカビや放線菌を分離しては抗生物質を産生していないか調べ、多くの新規の抗生物質を発見してきました。その中でも、アベルメクチンから合成されたイベルメクチンは、抗菌作用（細菌を殺す作用）はなかったものの寄生虫を殺す作用があり、しかも哺乳類の細胞にはほとんど影響しないことが分かり新薬として販売されました。この抗寄生虫薬イベルメクチンは、当初、馬の線虫症や犬のフィラリア症など獣医学領域で使用されていましたが、その後ヒトの熱帯地方の風土病オンコセルカ症（河川盲目症）およびリンパ系フィラリア症に極めて優れた効果を示すことが判明し、中南米・アフリカにおいて毎年約2億人余りの人々に投与され、これら感染症の撲滅に貢献しています。さらにイベルメクチンは、世界中で年間3億人以上の人々が感染しながら、これまで治療薬のなかった疥癬症や沖縄地方や東南アジアの風土病である糞線虫症の治療薬としても威力を発揮しています。彼に医学生理学賞が贈られた理由の一つとして、この新薬の利益に固守することなく、無償でその使用を許可したことで多くの人命を救ったことがあげられます。現在、先生が発見された多くの抗生物質は抗菌活性や抗寄生虫活性ばかりでなく、抗がん活性、あるいは酵素阻害剤として多くの医薬品あるいは試薬として世に出回っている。近年にない既に人類に貢献している発見としての受賞は、日本人が誇りに思うべき受賞だと思います。